

## 平成 28 年度霞ヶ浦学講座 第 13 講 実施報告

実施日時：平成 29 年 3 月 26 日（日）13:30－15:30

場所：霞ヶ浦環境科学センター多目的ホール

講師：沼澤 篤（霞ヶ浦環境科学センター嘱託） 参加者数：41名

**テーマ：「霞ヶ浦の歴史 2—近代～現代（水害の克服から開発へ、水質悪化から改善へ）」**

**要旨：**江戸末期の土浦は霞ヶ浦からの逆流による水害に悩まされ、長島尉信、色川御蔭らの研究に基づき、明治期には色川三郎兵衛らが中心になって洪水対策に奔走しました。一方、明治期の霞ヶ浦では、高瀬船や蒸気船の水運で津々浦々、利根川水系各地が東京と結ばれ、庶民や文人墨客が東国三社詣、水郷観光を楽しみました。その後、日本鉄道海岸線（現 JR 常磐線）開通、自動車普及、道路網や橋梁の整備で、物流の主役は陸運に移りました。沿岸では大規模干拓が着手されましたが、水害克服が水郷農民の悲願でした。水産業では帆引漁が普及し、佃煮生産が盛んになりました。

戦後復興の基礎として、建設省は利根川下流の放水路事業（河道の分離、拡幅、浚渫、築堤）を本格化し、常陸川は利根川下流と分離されました。その推進には治水の父と呼ばれた須田誠太郎（旧牛堀町長）らの貢献がありました。これによって水害は激減しますが、海拔高度が低い霞ヶ浦に塩水が逆流し、塩害が生じました。建設省（現国交省）は地元の要望を受けて、常陸川水門（逆水門）を 1963 年に設置しました。また鹿島臨海工業地帯、筑波研究学園都市建設にともない、霞ヶ浦は安定水資源として期待され、淡水化されました。築堤によって水害が皆無となり、干拓地を含む沿岸の湿田は土地改良によって排水、乾田化が進み、大型農機が入る優良農地へ変貌しました。また湖水は沿岸各地の揚水機場で取水され、農業用水として遠隔農地へ送水されています。県西地方では霞ヶ浦用水事業が農業の安定化に貢献しました。首都圏に隣接するつくば市、牛久市、龍ヶ崎市などでは住宅団地が造成され人口が急増しましたが、その上水道水は霞ヶ浦から供給されています。こうした県南の発展に、「霞ヶ浦開発事業」（1996 年概成）が大きく貢献しました。

他方で、治水・利水を優先した「霞ヶ浦開発」の負の側面として、過度の富栄養化（アオコ発生）、生物多様性低下、湿地・植生帯の激減、水産業の衰退を招きました。そのうち、富栄養化は閉鎖性水域の宿命ですが、都市化などで流域の土地利用が変化し、農業や畜産業の構造変化、森林減少などの要因が拍車をかけました。水産業では天然漁業から育てる漁業への転換が図られ、鯉網生簀養殖漁業が一時期生産量を伸ばしましたが、度重なる大量斃死を経て規模縮小を余儀なくされました。

近年、地域社会では水質保全や自然再生など、霞ヶ浦の環境改善が大きな課題となっています。茨城県では霞ヶ浦水質保全条例（旧霞ヶ浦富栄養化防止条例）、国では湖沼水質保全特別措置法（湖沼法）に基づく霞ヶ浦水質保全計画（5 年ごとに更新）を策定し、下水道普及率向上や農業集落排水処理施設、高度合併処理浄化槽設置等の成果を上げています。また第 6 回世界湖沼会議(1995 年)を契機として、茨城県霞ヶ浦環境科学センターを設置し、水質保全研究の推進及び環境教育、交流促進、市民活動支援事業に取り組んでいます。